２０１１年度明治大学農学部一般選抜入学試験に関わるお知らせ

２月１５日に実施しました農学部一般選抜入学試験において,「国語」「政治・経済」「世界史Ｂ」「日本史Ｂ」の問題に不備があることが判明しましたのでお知らせします。大変ご迷惑をおかけしました。心よりお詫び申し上げます。

１　試験日
　２０１１年２月１５日（火）

２　試験科目「国語」
（１）内　容
　問題冊子Ｐ.６　問題(一)問四は,適切な選択肢がありませんでした。
（２）対応措置
　当該設問については，全員正解とします。

３　試験科目「政治・経済」
（１）内　容
　問題冊子Ｐ.７１～７２　問題〔Ⅲ〕の文章に不備があったため，問２６に適切な解答がありません。
（２）対応措置
　当該設問については，全員正解とします。

４　試験科目「世界史Ｂ」
（１）①内　容
　問題冊子Ｐ.４　問題〔Ⅰ〕問７の選択肢の文章に誤植がありました。
　②対応措置
　当該設問については，正解を複数とします。
（２）①内　容
　問題冊子Ｐ.　２０　問題〔Ⅴ〕問１０の文章に誤植がありました。
　②対応措置
　正答に影響しませんので，特別な措置は講じません。

５　試験科目「日本史Ｂ」
（１）①内　容
　問題冊子Ｐ.２７～２８　問題〔Ⅱ〕２の文章に不備があったため，問８

を解答することができません。
②対応措置
当該設問については，全員正解とします。

（２）①内　容
問題冊子Ｐ．２８　問題〔Ⅱ〕問９の選択肢に不備がありました。
②対応措置
当該設問については，正解を複数とします。

（３）①内　容
問題冊子Ｐ．３１　問題〔Ⅲ〕２の文章に誤植がありました。
②対応措置
正答に影響しませんので，特別な措置は講じません。

（４）①内　容
問題冊子Ｐ．３４　問題〔Ⅳ〕問４の選択肢に不備がありました。
②対応措置
当該設問については，正解を複数とします。

（５）①内　容
問題冊子Ｐ．３７～３８　問題〔Ⅴ〕２の文章に不備があったため，問２の解答番号４２を解答することができません。
②対応措置
当該設問の解答番号４２については，全員正解とします。

以　上

２０１１年2月１７日
明治大学農学部

国　語　問　題

はじめに裏返して表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. この問題は 12 ページあります。
2. 解答番号は 1 ～12, 101～106, 201～203 です。
3. 数学・化学・生物は裏面から順にあります。

国語

（解答は解答用紙に横書きで記入すること。解答番号は1～12、101～106、201～203）

（一）　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

わたしたちが社会的な存在であるだけでなく、身体そのものが対ではたらいたり、複数で共振したり交感しつつ存在するものであるということを考えるのに、わたしが次にまず〈食〉というシーンからはじめるのには、わけがある。

食について書かれた本や雑誌は山とある。通の「食」記、素人用のレストラン情報、レシピーのたぐい……。そのようななかでなぜ食べることから考えはじめるのか、その理由はわたしのばあい三つある。

まず第一に、人間は他の生き物を殺（あや）めることなしに生きていけないということ、調理という場面がそういう人間の生存条件を思い知らされる最後の場面だということである。ということは、それは「リアル」という社会的な感覚が醸成されるもっとも初源的な場面だということである。

第二に、食事というのは身体文化の伝承がおこなわれるもっともベーシックな場面だということである。家族や共同体という、たんなる集合体ではなくて、からだを相互に浸透させあっているような親密性の空間の核をなすのが、ともに食べるという場面だということである。

そして第三に、見えることを見させる絵画、聞こえるということを聞かせる音楽があるように、あるいはまた、考えることを考えさせる、意識していることを意識させる哲学があるように、「食べるというのはこういうことだったのか」と、食べるということの意味を舌でじっくり味わわせ、考えさせるような料理があるはずだ、そしてそれにいつか出会いたいという私的な願いのよ

うな理由が、わたしにはある。

調理における「殺める」ということの意味、食事における「いっしょに」食べるということの意味、そして味覚をきっかけにふれる「食」の意味、これらを知るには想像力が要る。そういう意味で、[1]食べるということにはどこか、わたしたちの想像力の核となるものを育むところがある。これがここで食にこだわる最大の理由である。

家族がそろって自宅でご飯を食べるというのは、戦後間もないころに月に一、二度、家族がそろって洋食屋さんやデパートの食堂に行ったのと同じくらい、いまの多くの家庭ではたまのことになっているようだ。心ハズ[a]ませ、そしてちょっと気恥ずかしそうに、わたしたちは街なかへ行った。[2]同じ気持ちでいまは家の食卓につく。

他人といっしょに食事をするというのは、楽しいだけでなく、想像力を養うところがある。見える光景、響きわたる音、あたりに漂う匂い、あるいは空気の寒暖。それらはそこに居合わせる者が同時に感じる。そして体験を共有していることをたがいに表情ですぐに確認する。食べ物は口にふくむ。口のなかで、つまり身体の内部で、じっくり味わう。だから他人のそれはおぼろげにしか分からない。他人が舌や喉で感じているその味わいは想像力をはたらかせないとなかなか共有できない。だから「おいしい?」と、不安げに訊く。おいしそうにしている、とは分かっても、その味覚のニュアンスは一人ひとりが身体の内部でじっくり味わうものなので、傍からはなかなか分からないものなのだ。他人の思いや感情への想像力は、このようにともに食べるなかで育まれてゆく。他人の思いへの思い、それはこういう食事の席で養われるのだ。

想像力というと、よく論理的な思考力と対比される。感性対理性といったぐあいに、である。が、そのどちらも、いまここにはないもの、[3]不在のものへと向かう心の動きとしては同質である。

わたしたちの社会では、生きるうえでもっとも基本的な出来事が、じつは見えない仕組みになっている。わたしたちがふだん食しているもの、それがどこで作られ、どういうひとの手を経てここにあるのか(食料用の動物の解体や食材の輸入調達の過程)、ひとはどのようにして生まれ、どのようにして死んでゆくのか(女性の出産やひとの屍(し)体の処理過程)などのシーンは視野から隠されている。そのため、調理された肉を、パックされた食材を、胎脂(たいし)や血液を拭[b]われた新生児を、死化粧をほどこされ正

装した遺体をしか、わたしたちは見ない。どういう作業をへて、肉や食材や新生児や遺体がいま、ここにあるのか、それへと向けて想像力がほとんど発動しなくなっている。あるいは、たとえば独り暮らしの老人、耳の不自由なひと、不登校の少年は、この世界をいまどんなふうに感受しているか。むかしのひとはどんな衣食住の生活をしていたのか。別の国の住民をいまどんな不幸が襲っているか……。目の前にないそういう出来事や過程を想像すること、論理的に問いつめてゆくこと、そういう不在のものへの心のなびきのその長さが、だんだん短くなってきているような気がする。

それらを思いえがくには、想像力が要る。論理的思考も要る。ここで想像力と論理的思考は、感性か知性かといった対立をなすのではない。ともに、不在のプロセスへの感受性としてである。そういう不在のものへの感受性の根は、他人とともに食べるという経験のなかで育まれる。この経験を小さいころに十分にしておかないと、わたしたちは他人への文字どおりの意味での「思いやり」を欠くことになる。いや日々していないと、他人を思いやる濃(こま)やかな気持ちがしだいに乏しくなってゆく。思いをどのようにして向こうに、つまり見えも感じもできない不在の領域に届けたらいいのか分からないから。

もともとは味覚をあらわす「テイスト」という言葉が、人間の趣味や道徳感覚を、濃やかなセンスや判断力を、同時にあらわすのは、きっと偶然ではない。

料理をするということについても考えておこう。ひとは食べずには生きていけない。そして食べるためには、食べるものを作らなければならない。狩猟民や採集民にしても、獲物や採集物を、調理もせずに食べるのはまれであろう。調理は、人間生活におけるもっとも基礎的な行動であることは疑いない。火がしばしば文明の象徴とされるのも、おそらくそういう理由からであろう。

が、この[4]調理といういとなみに、奇妙なことが起こっている。独身の人たちにかぎらず、料理をしないひとが増えてきたというのは、正確な数字情報はもっていないが、コンビニエンス・ストアやデパートの地下の食料品売り場、あるいは夜の居酒屋などの風景を見るかぎり、どうもたしかな事実のようである。昼休みともなると、みずから調理したお弁当を開けるひとはさらに少なくなる。ほとんどのひとが社員食堂に行くか、弁当を買いに行く。パンやスナック菓子ですませるひとも少なくない。

作らないということは、食事の調理過程を外部に委託するということ、そのことの意味は想像以上に大きいように思われる。

たしかに、むかしは調理も公共の場で、たとえば露地の共同炊事場でおこなわれることが多かった。それは戦後の二十年くらいまではふつうの光景だった。その後料理の仕事は「マイホーム」に内部化されたのだが、現在ふたたびその過程が、わたしたちからは見えない場所に移動させられつつある。それはちょうど、かつて排泄が野外や共同便所でなされ、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたのに、下水道の完備とともに排泄物処理が見えない過程になったのと同じことである。

それとほぼ並行して、病人の世話が病院へと外部化された。出産や死という、人生でもっとも[5]のっぴきならない瞬間も家庭の外へと去った。家で母親のうめき声を聴くことも、赤ちゃんの噴きだすような泣き声も聴くことはなくなってしまった。いや、じぶんの身体でさえ、もはやじぶんでコントロールできず、体調がすぐれないときには、すぐに医院にかけつけるしまつだ。自己治療、相互治療の能力はほぼ[c]コカツした。その点で、身体はもはやじぶんのものではない。

誕生や病いや死は、人間が有限でかつ無力な存在であることを思い知らされる出来事である。同じように排泄も、じぶんがほかならぬ自然の一メンバーであることが思い知らされるいとなみである。そういう出来事、そういういとなみが、「戦後」という社会のなかで次々に外部化していった。そして家庭内にのこされたそういう種類の最後のいとなみが、調理だった。

ひとは調理の過程で、じぶんが生きるために他のいのちを破壊せざるをえないということ、そのときその生き物は渾身の力をふりしぼって[d]抗うということを、身をもって学んだ。そしてじぶんもまたそういう生き物の一つでしかないということも。そういう体験の場所がいまじわりじわり消えかけている。見えない場所に隠されつつある。このことがわたしたちの現実感覚にあたえる影響は、けっして少なくないと思う。

わたしたちは日々、獣を殺し、魚を釣り、菜を毟(むし)って食べている。そしてそれをほんとうにおいしくいただく。ひとつのいのちが別のいのちの火に変わる。が、[6]宇宙的とも言っていいこの単純な事実を、わたしたちはふだんひとの眼に触れないようにばかりしている。肉や魚を切り身にし、透明ラップをかけて売ったりして。それどころかじぶんたちの誕生や死も、病院というひ

との眼に触れない場所で処置するようになった。新生児も遺体も、きれいにされ、衣にくるまれてから対面するようになった。

この覆いは残酷さを隠すためのものだろうが、ほんとうは、いのちのやりとりというもっと大事なものを隠してしまっているとは言えないか。

（鷲田清一「からだの幸福」より）

問一　二重傍線部a・cのカタカナを漢字に直して書きなさい。解答番号はaが［101］、cが［102］

問二　二重傍線部b・dの漢字部分の読み方を平仮名で書きなさい。解答番号はbが［103］、dが［104］

問三　傍線部1「食べるということにはどこか、わたしたちの想像力の核となるものを育むところがある」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は［1］

A　食べることに対する想像力は、人間のいとなみの中で、最も強いものの一つであるということ。

B　同じ場所で、同じ料理を共に食べることによって、人間の想像力は共同性を獲得していくということ。

C　目に見えない出来事を身近なものとして感じるためには、まず身近な食べ物に対する興味を持つことが必要であるということ。

D　他者が感じる味覚の微妙な差異は、想像することにおいてしか、共有することができないものだということ。

E　他人への思いやりは、人間が生きるために不可欠な「食」の大切さを知ることで、はじめて獲得されるということ。

問四　傍線部2「同じ気持ちでいまは家の食卓につく」とあるが、家で食事をするとき、なぜ、そのような「気持ち」が起こるのか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 2

A　家族全員で食事をすることが少なくなったため、一緒に食事をするときは幸せを感じるから。
B　家庭での食事が外部化され、非日常的なものになってしまったから。
C　普段は外食や出来合いのものが多いが、久しぶりに手作りの料理が食べられるから。
D　普段は顔を合わさない家族が、一家団らんの食事風景を演じなければならないから。
E　家族の親密性が想像力の欠如によって弱まったことを、何とか補おうとするから。

問五　傍線部3「不在のものへと向かう心の動き」とは、どのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 3

A　感性や想像力だけでは正確さに欠けるので、理性や論理力といった知的な能力も加味しなければ、物事の本質を捉えられないということ。
B　味覚のニュアンスという目に見えないものを味わうためには、想像力が不可欠であり、論理力は補助的なものにすぎないということ。
C　普段の生活で目にしないものは、想像力を発動させることが極めて難しいので、感情に左右されない論理力によって問題の根幹を問いつめていくということ。
D　食事によって養われた他者への共感と想像力は、やがて論理的な思考に変わり、より広い世界へと視野を広げていくということ。
E　直接には目にしないことでも、人間のいとなみとして重要な出来事や過程に対して、想像力と論理力の双方を働かせるということ。

問六　傍線部4「調理といういとなみ」とあるが、「調理といういとなみ」によって人間が気づかされるのはどのようなことか。本文中の言葉を用いて、三十五字以内で答えなさい（句読点等も一字とする）。解答番号は 201

問七　傍線部5「のっぴきならない」の意味として正しいものはどれか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 4

A　人として大切なこと。
B　正確な判断ができないこと。
C　非常に危険な状態であること。
D　他人に任せることができないこと。
E　避けることも退くこともできないこと。

問八　傍線部6「宇宙的とも言っていいこの単純な事実」とは、どういうことか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 5

A　普遍的で疑うことのできない真実であるということ。
B　考えるまでもない分かりやすい事実であるということ。
C　大きいがゆえに、逆に分かりやすくなるということ。
D　誰もが知ることができるほど、簡単な問題だということ。
E　あまり熟慮されていない、短絡的な認識であるということ。

問九　次の文を、本文の適切な箇所へ戻し、その文が入る直前の五文字（句読点等も一字とする）を抜き出して答えなさい。解答番号は 105

【脱文】「味覚のばあいは、すぐにはそういかない。」

問十　次のA〜Eのうち、本文の内容と合致するものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 6

A　著者が「食」にこだわる理由の一つは、味覚という感覚の不思議さを考えさせてくれる、奥深い料理に出会いたいという希望があるからである。

B　食事におけるさまざまなマナーや想像力は、人間の趣味や道徳性、あるいは濃やかな感覚や判断力に影響を与え、その人の人生観を形成していく。

C　出産や動物の解体という生死に関わる事柄が、現代人の目から遠ざけられているのは、人間の本能的な恐れの感覚が根底にあるからである。

D　戦後の日本社会が家の外へと追いやり、見えなくしてしまったものの多くは、人間のいのちにまつわる本質的ないとなみであったということができる。

E　人間が生きていくためには他の生き物のいのちを殺めなくてはならないが、そのこと自体が問題なのではなく、食に関する想像力の欠如こそが問題である。

(二)

次の文章を読んで後の問に答えなさい。なお、本文中の「少将大徳」は、かつて少将として帝(仁明天皇)に仕えていたが、今は出家をした大徳(高徳の僧)のことである。

かくて〔イ〕世の中にありけりといふことを聞こしめして、五条の后の宮より、内舎人(うどねり)を御使にて、山々たづねさせたまひける。「ここにあり」と聞きていけば〔①〕うせぬ。「かしこにはあり」と聞きてたづぬればうせぬ。えあはず。からうじて、〔②〕かくれたる所にゆくりもなく往(い)にけり。えかくれあへであひにけり。「宮より御使になむまゐり来つる」とて、「おほせごとには、かう帝も〔ロ〕おはしまさず、〔ハ〕むつまじくおぼしめしし人をかたみと思ふべきに、〔1〕かく世にうせかくれたまひにたれば、いとなむ悲しき。などか〔2〕山林に行ひたまふとも、ここにだに消息ものたまはぬ。御里とありし所にも、〔ニ〕音もしたまはざなれば、いとあはれになむ〔ホ〕泣きわぶなる。いかなる御心にて、かうはものしたまふらむと聞えよとてなむおほせられつる。〔3〕ここかしこたづねたてまつりてなむ、まゐり来つる」といふ。少将大徳うち泣きて、「おほせごと、かしこまりてうけたまはりぬ。帝、〔③〕かくれたまうて、かしこき御蔭にならひて、おはしまさぬ世に、しばしもありふべき心地もしはべらざりしかば、かかる〔4〕山の末にこもりはべりて、死なむを期(ご)にてと思ひたまふるを、〔ヘ〕まだなむかくあやしきことは生きめぐらひはべる。いともかしこくとはせたまへること。童(わらはべ)の侍ることは、さらには忘れはべる時も侍らず」とて、

「かぎりなき雲ゐのよそに別(わか)るとも〔ト〕人を心に後(おく)らさめやは

となむ申しつると啓したまへ」といひける。この大徳の顔かたち、姿を見るに、悲しきこともものに似ず。その人にもあらず、〔5〕影のごとくになりて、ただ蓑(みの)をのみなむ着たりける。少将にてありし時のさまの、いと清げなりしを思ひ出でて、涙もとどまらざりけり。悲しとても、かた時人の〔④〕ゐるべくもあらぬ山の奥なりければ、泣く泣く、「さらば」といひて帰り来て、この大徳たづねいでて、ありつるよしを、上のくだり啓せさせけり。后の宮も、いといたう泣きたまふ。さぶらふ人々も、いらなくなむ泣きあはれがりける。宮の御返りも、人々の消息も、いひつけてまたやれりければ、ありし所にもまた〔⑤〕なくなりにけり。

(『大和物語』)

（注）○五条の后の宮——文中の「帝（仁明天皇）」の皇后。　○内舎人——朝廷に仕え、天皇の雑務や警護に当たる官人。
○御里とありし所——少将大徳の自宅だった所。　○死なむを期にて——死ぬまでずっと。
○上のくだり——上の件。前文で述べたことがら。　○いらなく——甚だしく、の意。

問一　傍線部イ「世の中にありけり」は「世の中に生きていた」といったほどの意味だが、これについて、

（Ⅰ）誰が「世の中にありけり」なのか。次の中から適切なものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は［7］

A　五条の后の宮　　B　内舎人　　C　帝
D　少将大徳　　E　童　　F　さぶらふ人々

（Ⅱ）その人物がどのような状態で「生きていた」のかは、続く本文によっても推測できる形になっているが、本文中、波線を施した1〜5の中には、その人物の様子を表したものではないものが一つ含まれる。それを指摘して、該当する記号をマークしなさい。解答番号は［8］

A　1「世にうせかくれたまひにたれば」
B　2「山林に行ひたまふ」
C　3「ここかしこたづねたてまつりて」
D　4「山の末にこもりはべりて」
E　5「影のごとくになりて」

問二　二重傍線部分「とて」の受ける範囲はどこからか。その最初の三字を抜き出して答えなさい（句読点等も一字とする）。解答番号は 106

問三　傍線部ロ「おはしまさず」と内容的にほぼ同様となるものを、本文中、破線を施した①〜⑤の中から一つ選び、該当する記号をマークしなさい。解答番号は 9

A　①「うせぬ」
B　②「かくれたる」
C　③「かくれたまうて」
D　④「ゐるべくもあらぬ」
E　⑤「なくなりにけり」

問四　傍線部ハ「むつまじくおぼしめしし人」とは誰を指すか。次の中から適切なものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 10

A　五条の后の宮　　B　内舎人　　C　帝
D　少将大徳　　E　童　　F　さぶらふ人々

問五　傍線部ニ「音もしたまはざなれば」とあるが、「音もせず」とはどういうことか。簡潔に説明しなさい。解答番号は 202

問六　傍線部ホ「泣きわぶなる」の「なる」についての文法の説明として適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 11

A　断定の助動詞
B　伝聞推定の助動詞
C　形容動詞の活用語尾
D　動詞

問七　傍線部ヘ「かくあやしきことは生きめぐらひはべる」の意味として適切なものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 12

A　このように、不思議なことが起こり続けております。
B　このように、不思議なことには、生き長らえております。
C　このように賤しい身分となってもこの世にとどまっております。
D　このように、いかにも賤しいことですが、生き続けております。

問八　傍線部ト「心に後らさめやは」とほぼ同じ意味となる部分を本文中から十字以内で抜き出しなさい（句読点等も一字とする）。解答番号は 203